

けんかの後

一

四年生の研吉けんきちは、学校はあまりよくできませんが、おとなしい子なので、だれからも悪くわる言われたことがありませんでした。

研吉は組中で昌二しょうじさんという子と一とうなかよ

くしていました。昌二しょうじさんは、妙蓮寺みょうれんじというお寺の子で、色の白い目のぱつ



一とう：
いちばん

ちりしたよくできる子で、みんなからとてもすかれています。

研吉はそのなかよしの昌二さんと、たった一度な^どかたがいをして、一週間ほど口も聞かずにつまらない思いをしたことがありました。

ある冬の夕方、研吉は妙蓮寺の門の石だんにこしかけて、昌二さんといろんな話をしていました。そばの馬や汽車などの落書^{らくが}きがいっぱいしてあるついに、入り日がうす赤くさしていました。ふと昌二さんが、うれしそうににこにこして、

「研^{けん}ちゃん、ぼく、こんどカナリヤをかうよ。」と言い出しました。

「町のおばさんとこのカナリヤが、子を四羽^もうんだんだって。そのうちのおすとめすを一羽ずつ、ぼく持^もってきてもらうんだ。」

ついに…

土で作ったかべ

研吉はそれを聞くと、もう先^{せん}、自分の家^{うち}でも、カナリヤをかってたときのことを思い出しました。お父さんが町から買ってきてかい^{はじ}始めたのです。はじめのうちはみんなめずらしがって、一しようにけんめいにめんどうを見てやりましたが、日がたつにつれてあきがきて、二三日も水をかえてやらないでいたり、かごなどもきたなくなつたままのをいく日もほっておいたりするようになりました。

それでもカナリヤは元気で鳴いていましたが、そのうちに、おとなりのねこが来て、えんがわに出してあつたかごをひっくり返して、おすの方をとつていってしまった。あとに残つたためすは、それから間もなくのきにつるしたままわすれてねてしまつて、あくる朝見るとあおむきになつて死^しんでいました。

それからは、研吉は小鳥なんてものは世話せわのかかるやつかいなもので、かつてもじきに死んでしまうものだと思いきんでしまいました。

「ね、研ちゃん、カナリヤはじき大きくなって子をうむようになるってさ。そうしたら君きみにもあげるよ。」と昌二さんはとくいそうに言います。

「カナリヤなんて、世話せわがうるさいよ。」と研吉は言いました。昌二さんは、「うそだ。世話せわなんてちつともかかりやしないよ。」と打ち消うすように言いました。

「かつてみりや分かるよ。もう先せん、ぼくん家ちでもかったんだもの。とても、めんどうだよ。」

すると、昌二さんはへんな顔をして、

「めんどろじやないよ。ちつともめんどろじやないよ。」と言いはりました。
研吉もまけずに、

「だって、カナリヤなんてつまらないよ。かっでもじき死しじまうんだもの。」
と言いました。すると昌二さんは、ふんとおこって、

「ふん、いいよ。」と言うなり、石だんをかけ上がって門の中へバタバタとか
けこみました。と思うとくりの手前のところでボタンとたおれころ転びました。や
つと起おき上がると、着物きものをまくってひざのへんをなでていましたが、ひよい
とこちらをふり返かえって、くりへ入いってしまいました。

研吉は、昌二さんをおこらせてしまつて、さびしい気持きもちちで家うちへ帰かえつてきま
した。いつもは人と言いいあらそいをしたこともないのに、どうしてあんな口の

きき方をしたんだろう、あした学校がっこうへ行ったら、あやまろうと研吉は思いました。

二

あくる日、昌しょうじ二さんは、学校で研吉けんきちに会っても、しらん顔をしていました。それで研吉も、今までの気持ちきもちがくじけて、

「へん、向むこうでだまっているんなら、こっちだつて口を聞いてやるもんか。」
という気になって、すれちがっても、つんとすましていました。

しかし、そのまま二、三日もたつと、研吉はさびしくてたまらなくなりまして。何とかしてなかなかおりをしたいのですが、こっちからおれて出るのも、くやしいようなバツの悪いわるような気がして、相あいかわらずつつんしていました。

昌二さんの方でも、研吉と同じ通りに思っているらしいのが、ありありと目に見えました。

それからまた四、五日もたったしゅうしんの時間でした。受持ちの荒木先生うけも あらきは、放課のかねがなると本をバタリととじて、

「これから級長のせんきよをします。みんな、自分のすいせんしたい人の名前を紙にお書きなさい。」と言われました。

研吉たちの級では、これまでずっと、忠さんという子が級長をとおしてきたのですが、その忠さんが、この間よその学校へ転校してしまったのです。

研吉はノートの紙を一まいやぶってからえんぴつをとり上げて、

「さあ、だれを書こうかな。」と考えました。いつもなら一も二もなく昌二さ

しゅうしん：戦前の学校で教えた教科の一つ。いまの「どうとく」にあたる

んに投票するのですが、今はなかたがいをしているのですから、その昌二さんとうひょうをかつぐのは、いまましい気がします。

研吉は、とうとうせいせきは組中でとういいけれど、何だかすきでない時とき雄さんおという子の名前をかいてしまいました。そして、紙を集めにきた、列れつのお一とう後ろの子にわたしました。

研吉が、自分から三人おいた右手にいる昌二さんをひよいと見ますと、昌二さんは左の手で紙をおおうようにし、顔を紙にくつつけるようにして書いています。書き終おえると、紙を集あつめにきた子にわたしました。

わたすと、昌二さんは、ひよいと研吉の方を見ました。目と目がかち合ったので、研吉はあわてて顔をそむけました。

ほうか
放課の間に先生はみんなの投票を調べて、紙に書いて次の時間に持ってこ
られました。そしてきょうだんへ上がるなり黒板に書き始められました。

みしまときお
三島時雄 十九点

さりのしょうじ
桐野昌二 十九点

みしまときお
三島時雄というのは、研吉が投票した子です。二人が最高の同点です。

あのととき研吉が昌二さんに投票していれば時雄さんより二点多くなつて
級長になれたわけです。しなくていい気味だったと研吉は思いました。

先生はつづいて、せいせきの五番までの子の名前を書かれましたが、とく点
はずつとおちています。先生は一とうおしまい、

たきもとけんきち
瀧本研吉 一点

とお書きになりました。みんなは、どつとわらいました。研吉は顔を赤くして下を向きむました。とつてもはずかしい気持きもちでした。

「でも、だれが自分に投票とうひょうしたのだろうな。ひよつとしたら、昌二さんじゃないのかしら。」

こう思つて昌二さんの方を見ますと、昌二さんはさつきから研吉の方を見ていたらしく、二人の目がまたぶつかりました。昌二さんは、にっこりわらつて向むこうを向むきました。

研吉は、昌二さんの様子ようすで、昌二さんが自分に投票とうひょうしてくれたのだと感かんづきました。先生は、

「三島君と桐野君とが最高たかひこうの同点どうてんですから、クジで決きめることにします。」と

言つて、二人をきようだんの前へよび出して、こよりのくじをお引かせになりました。すると時雄さんが長い方を引きあてました。

時雄さんびいきの子たちは、

「わあつ。」と言つてよろこんで、パチパチ手をたたきました。

「じゃあ、これから三島君をきゆうちゆう級長、桐野君をふくきゆうちゆう副級長ににんめいします。」

と先生が言われました。

時雄さんは、にこにこして席へもどつてきました。昌二さんもわらいながら帰つてきてせきへ着つこうとするときに、研吉の顔を見てにっこりしました。研吉もにっこりわらいかえました。

でもじきに、研吉のむねの中に、大きな黒いものがいっぱいにおおいかぶさ

ってきました。

「あのととき、なぜ自分は昌二さんに投票とうひようしなかったんだらう。なんて心の小さな自分だらう。自分が昌二さんに投票とうひようしていれば、昌二さんは級長きゆうちようになつていたのだ。昌二さんは、ぼくみたいなものに投票とうひようしてくれたのに。」

こう思うと、研吉は、自分がはじしらずのひきょうもののような気がしていやになり、それだけに昌二さんしやうじがとてもえらい人のように思われてきました。

先生は、黒板こくばんの名前を消けしてしまおうと、

「ええ、こんどは第四十二課だいだったね。」と言いながら読本とくほんを開ひらかれました。

研吉は、

「こんどの放課ほうかには、自分の方から昌二さんにあやまらうよ。もうこれから、

どんなことがあっても昌二さんをおこらすまい。「とこう思い思い本をとり上げました。
